日本海区水産試験研究
連絡ニュース

第42号
新潟市万代島
日本海区水産研究所
印刷
株式会社新潟孔版社
昭和29年7月18日発行

日本海 (41)

北日本海における鰯漁況予報の発展

下村敏正

漁況が海況に至大の関係を持つことは、洋の東西を問わず、古くから注目されていた。史上最も著明なのは、中世紀諸王侯国の中にあって、強大な勢を振ったハンザ同盟の崩壊である。しかもその崩壊の最大原因は、海況異変に基く、バルト海鰊漁場の大不漁の慢性化であった。これについてはペッターソンが海洋学的に発表している通りである。

わが国でも、古来定置網漁業者、その他の漁業者によって、潮があまいとか辛いとか、又寒潮が強いとか弱いとか、色々な点から、海況と漁況との関係が云い伝えられている。

明治時代の古い、各水試の報告でも、漁況を海況に結び付けていないものはなく、海況の面から漁況を予測すると云うことは、何も目新しいものではない。ただ、多くの要素を含む「海況」を単に水温の上、下によって記載していて、いささか原始的であると云うにすぎないのである。

現在の北日本海における鰯漁況予報調査は、単に水温のみならず、対馬暖流の流れ方を、水平的、垂直的にも見て行く点に一つの進歩がある。又戦後以北の各水試が統一的計画の下に海洋観測を実施するようになったと云うことも一つの大きな特色である。昭和二十四年に日水研が創設され、各県水試の協試により、現在の調査体勢が確立され、現在は対馬暖流域南発調査の中に包含されている。日水研は微力ながらお手伝いをしている次第である。

過去五カ年に亘る、この海況に基く漁況予報は幸い毎年よく適中している。と云うことは、少くとも鰯漁況に関する限り、それを左右するものとしては、水温と塩分が一番大きな要素であることを示しているのであろう。

しかし漁況は海況のみに左右されるものではない。資源量や年級組成の生物学的要素にも大きな関係を持っている。いかに海況が良くとも、資源量自体が貧弱な年には、不漁となるはずである。現在は、従って、「資源量は一定」と云う仮定の上に立っているのである。

従って、気象の長期予報が定性から定量へと、数量化して来たのと同様に、漁況予報も今後はどうしても、一歩進んで量的予報を行わねばならぬが、そのためにもやはり生物学的なデータが必要となって来る。

又同じ「海況」と云っても、水温や塩分の外に、プランクトン、栄養塩類、照度等の分布が問題となって来る。

こうした海況要素を多元化すること、生物学的要素を取り入れることによって、現在のような単に豊漁である、不漁である、と云うてい度のものではなく、何万メ獲れる、と云う量的予測が可能となるであろうし、樽網の長さ、揚網の最適時刻、尾数等の予測等も可能となるであろう。

現在の体勢で五カ年を至過したので、これはこれとして、一段落の区切りをつける意味において、本年度中に一応の法則性を取りまとめる予定であるが、明年度からは、更にどういう風に改めて行くかを、各水試においても考究し、充分討試の上で、明年度からの実施計画を樹てたいと思う次第である。

（日水研南発部長）

主なる項目 —第四十二号—

- ○北日本海における鰯漁況予報の発表。　下村敏正
- ○第八回日本海海洋調査技術連絡会開かる。
- ○秋田県浅海改良事業
- ○魚　探　内橋潔
- ○煉製品の加熱に関する懇談会
- ○第二回北部水試利用担当者会議
- ○眞野に於ける鮮度保持講習会
- ○日本生態学会誌四巻一号発行
- ○イワシ資源調査資料第二号発行。
- ○日水研研究年報第一号発行
- ○第四、四二回研究談話会

第八回 日本海々洋調査技術連絡会 開かる

五月二十日、富山水産試験場が当番校関となって首題の会が開かれた。会議の次第は左記の通りであるが、出席者約四十名で盛会裡に全日終了した。

記

一、開会の辞　富山県水試場長　松本利一
二、挨　拶　第九管区海上保安本部水路部長　福島長次郎
三、試題（議長　第九管区　福島長次郎）
イ、前回以後の観測実施概要及び今後の計画の概要　第九管区海上保安本部　日本海区水産研究所
ロ、海況調査連絡について　舞鶴海洋気象台
ハ、従来実施されて来た夏期一斉観測の存廃について　日本海区水産研究所
ニ、夏期一斉海洋観測について　舞鶴海洋気象台
ホ、連絡協議会と対馬暖流開発協議会との関係について　山口県水産試験場
四、研究発表（座長　日水研　下村敏正）
イ、水温の変動について　舞鶴海洋気象台　菱田耕造
ロ、水中照度の計算について　舞鶴気象台　菱田耕造
ハ、対馬海流の変動について　九管区　田宮美孫
ニ、北部日本海の一九五二年六月におけるプランクトン分布及び一九五〇年九月、一九五一年七月との比較　日水研　下村敏正
ホ、卵、稚魚の分布を論ずる場合の二、三の注意について　日水研　下村敏正
ヘ、本年三月の日本海北部海象観測について　二管区　木下一三
ト、日本海表面水温の信頼度について　舞鶴気象台　中山一蔵
チ、対馬暖流下層の水塊（×層水）について（予報）　舞鶴気象台　中山一蔵
リ、若狭湾西部の海況に及ぼす陸水の影響について　舞鶴気象台　中山一蔵
ヌ、本年四月の海流瓶放流結果について　秋田水試　加藤坦
五、特別講演　日本海の海況と漁況の基本問題　東水大　宇田道隆
六、閉会の辞　日水研開発部長　下村敏正

決試事項

一、対馬暖流調査の海洋観測は、従来この連絡会で協議して行われて来た、夏期の日本海一斉観測と重複するので、本年度からは、対馬暖流調査に一本化して実施する。
二、各府県水試は、対馬暖流調査のシンポジウムが今後定期的に行われるので、この連絡会には今後オブザーバーとして出席する。従ってこの連絡会の本質は昔の、いわゆる三管方会議となるが、会期、講演題目等は日水研から、そのつど各府県水試へ連絡する。
三、以上の意味において連絡会規約の改正が決定された。（規約略）

以上

秋田県浅海改良事業

秋田県では去る六月十二日、県水試場長室において県水産課河上技師、水試水野場長、同三浦、山口両技師、日水研加藤技官参集の上、昭和二十九年度浅海改良事業効果判定試験の実施案を検討し、次の調査要項が採択された。即ち、調査対象はテングサのみとし本年度は船本と八森の両地域について六月から十月まで毎月二―三回にわたり、地先生育地の気象と生物環境要因の究明、過去の投石によるテングサ附着並びに成育状況、胞子の発生期を精査して、本年度以降の本投石事業をさらに効果的に推進することゝなった。

（日水研）

魚探 (38)

内楠　潔

新潟県に加茂農林と云ふ学校がある。其処では、生徒のほしい学用品が定価付で控室にならべられてあり、生徒は標示の代価を銭箱に入れて品物と交換することになっている相だが、最近は一度の間違もないときいている。しかし、戦後の頃はこの便利な方法も事故が起きて採用出来なかつた由である。

この取引は、条件によっては、なかなか便利な方法だから誰でも思いつくことであるから採用している処も尠くないと思ふが、私共が思つている程楽な取引でもないことは、戦後しばらくの間は採用したくとも其が出来なかつたと云ふ加茂農林の話でそれとわかる。

不見不語の交換は、交換の形式から言って極めて古いものであるが、本邦にも例のないことではない。松浦静山の甲子夜話には、くず商売として、わらじを売っている図が載せてあり「これ売人もなきに買ふ者も欺くことなき風俗は開けたる都会繁華の地よりいか計り尚きこと」とならずやとしている。又丹後の冠島と云ふ無人島に一小社屋があり、其処には白米が備蓄されてあつて、事故のために島泊りする漁師が察神の許可を得て借米することが出来、借りた米は必ず返却する風があった由である。戦時中や戦後では、名ある冠島の借米制度がどうなったかきいていないが、おそらく今はもう昔の語草となったことであろう。

皆の者が正直であった頃には挽や膳などを一時貸してくれる塚や岩屋があったが、今はもう貸してくれなくなったと云ふ説話は日本各地に多い。佐渡の羽田には弾三郎と云うムジナが住んでいて金を貸して呉れたものだが借りっぱなしの者や借手が多くなって、今はもう貸してくれないと慕石襍志に見えている。

こんな土俗的な資料からでもかつて、沈黙貿易と云ふ交換の一形式があったことがわかるわけだが、そうした沈黙貿易は、其当時の社会生活に於て切実に必要とした結果生れた交換の一形式あったが、今の社会ではそうした交換形式を成立せしめる様な社会的な要求はあり相にもない。早い話がどこでも言葉や文書が通ずるし、見た事もない隣人をおそれて、鬼神視する必要もなくなっているのだから、今日沈黙貿易をしようと思へば関係者の自負ある道徳律にたよるより外ないことになる。

若しも沈黙貿易が、加茂農林の様にうまく行かない処があったとしたら、元来が各自の道徳律を信じてはじめたことであるから更に寛大で、多少の損失をみてもおほまかに見たり考へたりして、そうした交換を続け行く様になって、損失を補って余りある日が来ると思ふ。

ちっとでも住みよく、美しいものを近くに造ろうとするのには、多少の損をしても笑って過してしまふ様なゆとりは各人が多少づつもっているに違いない。

（日水研所長）

煉製品の加熱に関する懇談会

新潟市内の煉製品の加熱状況調査の為、天野、内山、岡田（東海区水研）横関（北海道区水研）各技官が来所されたのを機会に煉製品の製法と鮮度保持に関する懇談会を六月三日午後一時から本所講堂で開催した。

参集者は市内業者及び県内保健所の衛生看視員を主として約五十名、天野技官（蒲鉾の加熱と食中毒）岡田技官（蒲鉾の坐りについて）の講演があり午後五時終了した。

（日水研）

第三回北部水試利用担当者会議

六月四～五日の両日、調査研究部豆理技官列席の下に石川、富山、新潟、山形、秋田、青森の各府県水試並びに日水研担当者が参集し第三回北部水試利用担当者会議が開催された。第一日の協議事項は南部水試利用担当者会議と同様であったが、第二日には下記の如き研究発表並びに新潟市内にある堀川煉製品工場・豊田式重油バーナー製作所を視察した。

(1) 資源化学調査（鯖）について　新潟水試
(2) 工場廃水調査について　〃
(3) 煉製品の水晒について　〃
(4) 岩木川の水質調査について　青森水試
(5) 鮮魚輸送試験　石川水試
(6) サステンに倚る油焼け防止　〃
(7) いわしの魚体測定から見た鮮度　〃
(8) 資源化学調査並に鮮度保持に関する研究経過報告　日水研

眞野に於ける鮮度保持講習会

五月二十日、佐渡郡眞野町眞野源業協同組合に於てヒラメの鮮度保持講習会が開催され、小島県水産講習所長より「ナマコの利用等について」、日水研野口利用部長より「鮮度保持の重要性とその方法について」の講演を行い、翌日ヒラメについて実地講習を行う予定であったが雨天の為中止した。

然し受講者は極めて熱心で、神経切断による鮮度保持を行い極めて優秀な成績を得て、実施の当日から効果が挙り、翌々日には一貫目百八〇円内外のヒラメが三〇〇円内外を示す様になったとの事である。（日水研）

日本生態学会誌四巻一号発行

日本生態学会は、日本植物生態学会、植物生態学会、動物生態学懇談会などが合体して去る五月二日に創立され、今回日本生態学会誌としての第一号が発刊された。生態学の進歩は最近著しいものがあるが、水産関係の研究者が、水界の動植物の生態研究を通じて、この学界に貢献することも強く希望されている。

水産関係者の全会員も六〇〇余名中約八〇名に達していて他に見られない。（日水研）

イワシ資源調査資料 第二号 発行

昭和二十七年一月―十二月のイワシ資源委託調査による資料をとりまとめた要報は、去る三月のイワシ資源調査担当者会議で発行することに決定され編集中であったが、このたび印刷完成し六月十六日発行された。（日水研）

日水研研究年報 第一号 発行

日水研の研究報告としては、今まで三号にわたる研究報告、創立三周年記念論文集、各学会に発表された論文十数篇等があるが、今後毎年一回、未発表の論文をまとめて研究年報として発行することになり、このたび第一号が発行された、内容は「能登海域におけるイワシの産卵時刻と夜間行動」外三十数篇。（日水研）

第四一、四二回 研究談話会

日水研では、五月二十六日（第四二回）六月二十三日（第四一回）研究談話会が開催され、両回とも活潑な討論があった。尚演題及び発表者次の通り（第四一回）

(一) 一九五四年春季に於ける日本海の海況について　向井　茂（南発部）

(二) 香住沖で行はれたスケトウ生態予備調査経過報告　大内　明（資源部）

(三) 人工採卵事業の是非　加藤源治（資源部）（第四二回）

(一) マイワシ卵、稚仔分布の距岸距離と能登近海の産卵場について。

マイワシ卵、稚仔の分布の距岸距離は大体四十浬以内で、特に多量に分布しているのは〇～二十浬であること、能登近海の産卵場は年により多少異るが猿山周辺に限られており、その年の主漁場と一致する。その産卵場形成要因について、産卵された卵、稚仔の移行について。

伊東祐方（資源部）

(二) 底魚群集構造の分析

佐渡海峡底魚群集の構造を分析し、それを構成する種社会の地位を知る方法等について　岡地伊佐雄（資源部）

(三) 一九五三年春―秋における秋田県沖合プラクトンの季節変化について。

対馬暖流調査において秋田水試が㊥ネットによって採集した試料に基づき、この水域のプランクトン相の変化について。

深滝　弘（南発部）

(四) 水産文献の十進分類法についての一案

山中一郎（資源部）